

「保育者性」育成における保育現場観察の意義に関する研究

－「幼児理解」の段階的発展の促進を目指して－

A study on the meaning of observations in the kindergarten
for bringing up kindergarten teacher-hood of students

－Aiming for a promotion of stepwise developments of understanding of young children－

代表者：小田倉 泉（教育学部・専任講師）

Izumi ODAKURA (Lecturer, Faculty of Education)

1. 目的

大学での4年間を通して、乳幼児教育に携わる保育者をどのように養成していくか、養成すべき性質・資質・能力の具体的な指標は何かということは、常に検討し続けなければならない課題である。

これまで、教育実習期間中や、長期間の定期的な観察によって学生の「幼児理解」の深まりが獲得されていく過程を追うなどの研究や実践がなされてきた。現場での幼児の観察は幼児理解を深めるための基本であるが、長期間の定期的な観察が困難な場合もある。このような場合、大学における理論的学びから得られる幼児観と、限られた回数の中での幼児の観察から得られるものとは、より効率的に作用し、相補的に関連し合い、「幼児理解」の発展を促進することが必要なのではないかと考える。「幼児理解」の段階的発展は、保育者としての専門性の獲得、向上と直結するものであるため、保育現場観察の意義を迫及することによって「幼児理解」の発展を促進することは、保育者養成において重要な意味をもつと言える。

このことから、本研究は「保育者性」とは何かを問いながら、「保育者性」の育成を助長する「幼児理解」の段階的発展を促進するための方策を、保育現場観察の意義と効果を迫及しつつ検討し保育者養成に示唆を得ることを目的とした。

2. 方法

本研究では、幼児教育専門科目「保育内容総論」（前期/木曜日/1・2限目、受講者110名〈幼児教育専修2年生23名、他専修4年生87名〉）および「幼児の生活環境」（前期/木曜日/3・4限目、受講者105名〈幼児教育専修2年生23名、他専修4年生82名〉）の授業内に、本学教育学部附属幼稚園、3回（2006年4月27日、5月18日、6月22日）、さいたま市内私立A幼稚園、1回（7月13日）の計4回、観察・訪問を行った。全4回の課題は、特定の幼児を一定時間観察する等、幼児理解を段階的に深めることを意図したもので、観察は附属幼稚園では70分、A幼稚園では160分行った。また、授業最終日、幼稚園参観についてのアンケート調査を行い、以上の課題とアンケートを分析することによって研究を進めた。なお、それぞれの講義の受講者の内、97名は両講義を受講している。

3. 結果と考察

「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書『幼稚園教員の資質向上について ―自ら学ぶ幼稚園教員のために―』（文部科学省、平成14年6月24日）は、幼稚園教員の専門性を提示し、多様な総合的資質・力量が求められることを明記している。ここに挙げられる資質は多様であるが、これらの資質を支える保育者の基本的専門性「保育者性」は、鯨岡の述べる「実践的、感性的専門性」（鯨岡、2000）に示されているのではないかと考える。幼児を受容しありのままの姿を認め、幼児の思いを間主観的に捉えること、これを保育者の基本的専門性として有していることは、保育者の資質・力量の向上において不可欠であると考え。「幼児理解」とは、この専門性により深められ獲得されるものであると同時に、「幼児理解」によってこの専門性は促進されるものではないだろうか。従って、「保育者性」の育成と、「幼児理解」の促進は相互的に関連し合い、その発展の過程に

において保育者の資質・力量は向上していくことが期待されると言えよう。

これらのことを踏まえて行った課題の分析から、以下のことが導き出された。

① 保育現場観察における「幼児理解」の意義

保育現場観察の質において鍵となるのは、どのような視点をもって、何をどれだけ観察するのかという観察の方法であるが、明確な観察への意識と課題意識をもって見据えなければ、遊び回る多勢の幼児と、幼児の間を忙しく立ち回る教師の有り様しか見えない。外的な事象を視覚的に捉えた課題の報告では考察を深めることはない。そこで本研究では、特定の数名の幼児を観察し、時系列でその言動、表情等を記録する方法で「幼児理解」に努めることを課題とした。これによって学生の視点が定まり、短期間の数回の観察ではあったが、段階的な変化を示す結果となった。保育現場での観察の視点は多様であるが、限定された期間に有効な観察を行う上では「幼児理解」のための個別的な観察が有効であることは、以下の②③からも明らかとなった。

② 観察による「幼児理解」の経験が「保育者性」を導く。

特定の幼児を注目する観察は、一人の人としての幼児の姿を学生に印象付け、学生は幼児の言動、表情に目を凝らし、言葉に耳を傾けるようになる。学生の「幼児理解」は直感的な未熟なものではあるが、「幼児理解」に近づく経験を通して、保育者のもつべき受容的態度へと学生が導かれつつあることが読み取れた。教育実習での学生の「幼児理解」は、初歩的な段階においては甚だ直感的なもので偏見や独断に陥りやすいものとされ、実習期間を通して経験に基づくより客観的な理解と把握に至ることが求められる。しかし、機会が限定されている中で「幼児理解」を目指す観察においては、例え直感的な「幼児理解」であったとしても、その経験を通じて幼児に共感し、受容する態度を育成することが優先され得るのではないだろうか。「幼児理解」を目指す観察は「保育者性」を導くものであり、「保育者性」の育成の過程で「幼児理解」が深化していくものと捉える必要があると考える。

③ 「幼児理解」の過程が幼稚園教育の実体を学生に示す結果となった。

第3回目の観察課題に、3度の観察経験を通してどのように自分が変化したかを記述する項目を提示したところ、「幼児理解」のための観察を通して、幼稚園教育を実体として理解できるようになったという報告が多く見られた。例えば、「今まで頭で理解していても実感が伴わなかった考えが、見てきた幼児を通して実体をもって理解するに至った」とあった。保育とは「幼児理解」によって構想、実践されるものであり(神長、2002)、幼児理解の姿勢が確立されてこそ、総合的指導力、保育構想力、実践力等の保育者としての教育実践を展開する能力が獲得される。「幼児理解」は、「保育者性」と共に総合的資質・能力の根幹に在るものである。幼児を「知ろうとすること」によって、幼稚園教育の個々の内容の意味を学生が再発見するに至ったと考えられる。

4. 今後の課題

本研究から、保育現場観察における「幼児理解」のための観察は「保育者性」の育成において有効且つ重要であり、幼稚園教育の本質を捉える上でも意義ある方法であることが示された。しかしながら、限られた期間において、全ての学生が確実に「保育者性」を身につけて行き、「幼児理解」を深めていくためには、「保育者性」の段階とその指標、「幼児理解」を段階的に深化させていく課題の質を検討していくこと、観察の事前指導、事後の振り返りのあり方についての検討が必要である。今後、保育現場観察を効果的に活用することによって、講義形式の科目において「幼児理解」の段階的発展を促進するための具体的方策を提示することを目指して研究を進めていきたい。

[主な参考文献]

岩立京子、竹田小百合「学生の観察による幼児理解の過程」『日本教育心理学会総会発表論文集』(42). 日本教育心理学会. 2000年. p.633
鯨岡峻「教師の専門性と園内研修の在り方」『初等教育資料』716巻. 2月号. 2000年. pp.92-98